學藝

令和６年(2024年)12月／第152号

― 特集：支部からの報告、小金井祭 ―

令和６年度　第３回支部長会　11月８日（金）

新年祝賀会料理試食会（支部長慰労会）

◇ 巻頭言　理事長あいさつ　同窓会について……理 事 長　森　富子… 2
◇ 副理事長　ふるさと　学大……副理事長　稲葉　孝之… 3
先を見据えて……副理事長　貝原　俊明… 3
◇ 支部紹介　中央区・新宿区・品川区・渋谷区・板橋区・立川市・府中市・調布市・小平市・国立市…… 4
◇ シンガポール便り…… 9
◇ 研究発表のお知らせ　板橋区・練馬区・江戸川区・八王子市・武蔵村山市……10
◇ 支部長会報告　～新年祝賀会にむけて～……15
◇ 副校長の活躍　荒川区・日野市……16
◇ 若手教員の活躍　足立区・三宅村……17
◇ 本部だより……会計部・総務部・研修部・調査部・広報部・お知らせ…18
◇ 我らのキャンパス　～第72回　小金井祭～……20

一般社団法人　東京学芸大学同窓会

同窓会について

理事長　森　富子

十一月二日土曜日に東京学芸大学ホームカミングデーと辟雍会の総会に参加しました。当日は、十一月にしては珍しく台風の影響で雨の降る小金井祭でした。それでも大学構内では、運動系の試合や芸術系の作品展、講演会等が活気を帯びて行われていました。中でも心に残ったことは、やはり東京学芸大学は教育学部だと感じたことです。テントの中では、雨が降っているにもかかわらず子どもたちが多く参加していて、ヨーヨー釣りやゲームなどを楽しんでいました。その子どもたちを優しく見守る多くの学生の姿を見て、素敵だなと思いそして安心しました。将来先生となって、子どもたちを育てるという気持ちが、この大学の構内にはあると強く感じました。

一週間に一度は大学に行くので、学大の雰囲気のよさを常に感じているのですが、構内を歩いていますと、大学時代の仲間に会っているような懐かしさを感じ、ほっとします。校舎はきれいになり、自然館の前の広場は噴水もなく大きく変わっているのですが、同じ志をもって学び、授業や行事、部活動やサークルの仲間たちと共に語り合い、楽しく、時には苦しく過ごしたこの大学時代に、一瞬で戻ることができるのは、同じ気持ちの仲間がいたからです。卒業して何十年たっても、学内の場所を言えば思い出し、最寄駅からの道々の風景を懐かしく語り合うことができるのは、同じ大学で学んだ日々があったからだと構内を歩きながら思い出しています。現在の正門の桜並木には、桜の木が減って寂しいのですが、今年のパリオリンピック金メダリストの柔道の角田夏実さん、パラリンピック入賞の水泳の西田杏さんのお祝いフラッグが掲げられています。野球の栗山英樹さんの活躍と同じように、東京学芸大学の卒業生の快挙に、同窓会としても心から賛辞を贈ります。

令和七年一月十九日には新年祝賀会を行います。久しぶりに参加人数に制限は設けません。支部の皆様に多く声をかけていただけたと思います。直接お顔を合わせて語り合い、お互いの気持ちを交換することは、とても大切なことだと思っています。令和六年になってから、各支部の会合に参加させていただくことが増えました。直接お話しをすることで、交流を深めることができました。大学の授業をオンラインで行っていた時期がありましたが、画面上でのやりとりは良いこともありましたが、やはり、同じ場、教室でお互いの息づかいがわかるやり取りの方がとても大切だと実感しました。新年会で多くの皆様と直接語り合い、その中で、同窓会への要望やご意見をお聞かせいただければと思います。新年会に参加して、楽しかった、また来年も参加したいと思える場にしたいと思っております。一月に多くの皆様と語り合うことを楽しみにしています。

大学の図書館の一階の入口を通ってすぐ左側のスペースに、辟雍会の皆様と協力して、教職支援コーナーを作っていただきました。これは前からご説明している同窓会からの寄附金の一部で賄っています。今まで、学生キャリア支援室にしかなかった教職関係の全国の過去問題集や応募要領などが一目でわかり、検索できる場所です。東京学芸大学は、教員を目指す学生が多い大学であることを意識づけるためにも大切な場所となっています。現在、教員採用試験については変更も多く、いくつかの課題がありますが、東京学芸大学の学生が一人でも多く教員を目指していくことができれば嬉しいと心から願っています。

東京学芸大学同窓会として、これからも今の学生や教職員の皆様に何ができるのかを考えていくこと、同じ同窓会の仲間の先生方のために、同窓会はどんなことをすればよいのか、多くの先輩方が培ってこられた実績をもとに、今できることを同窓会役員一同しっかりとやっていきたいと心から思っております。

皆様のご理解とご協力をこれからもよろしくお願いいたします。

ふるさと　学大

副理事長　稲葉孝之

コロナの渦に飲み込まれ『暗雲低迷』で始まった令和。それから五年間、『雲外蒼天』（どんな試練でも、努力して乗り越えれば快い青空が望めるという意味）だと信じ、その言葉の意味をかみしめながら過ごし、やっと日常が戻ってきました。

本同窓会でも、途絶えていた総会後の懇親会も新年祝賀会も徐々に規制を緩和して、会員の皆様との直接的なかかわりが復活してきました。

また、かかわり方の工夫も精力的に進めてきました。支部長会のオンライン化、ホームページの充実、管理職等名簿のＰＤＦ化等々、親密にかかわれないからこそ、会員の皆様とかかわる方法を考え、取り組んできました。

会員の皆様との様々なかかわりとかかわった際の会員の皆様の笑顔や喜びの声に接し、新たなる活動のエネルギーが湧いてきたことも確かです。

そんな中、私が同窓のかかわりの大切さを感じる出来事がありました。

東京学芸大学保健体育科の昭和五十二年入学の同級会が五年ぶり開催されました。Ａ類、Ｂ類、Ｄ類合わせて約百二十名のうち六十四名が集まりました。二時間という限られた時間でしたが、四十七年前に出会い、四年間を学大のキャンパスで一緒に過ごした日々を思い出し、卒業後の同級生一人一人の人生、生き様の一端を改めて知ることができました。

その時の同級生との笑顔での思い出話、語らい、笑い声、呼び名、思い出のアルバム、全てのかかわりから『ふるさと』を強く感じました。

アイドルグループの嵐が、二〇一五年にリリースした『ふるさと』という曲の歌詞に

「雨降る日があるから虹が出る
苦しみぬくから強くなる
進む道も夢の地図も
すべては心の中にある
助け合える友との思い出を
いつまでも大切にしたい
進む道も夢の地図も
それはふるさと」

とあります。

学大同窓会は、前進していこうとする会員の皆様の心の『ふるさと』になれるよう、これからも現状を冷静に読み解き、新しい世の中につながる次の一手を考えていきたいと思います。

先を見据えて

副理事長　貝原俊明

「子供たちのため」という言葉を旗印にがむしゃらに働いてきた方も多いと思う。教職調整額の引き上げや時間外勤務に応じた残業手当支給という話も遅すぎる。ゆえに教員不足につながってしまったのではないのか。そして今、働き方改革というお告げ。私達の本務である指導の質を高め、子供たちに効果的な教育を行うために働き方を見直そうというもののはずだったが、「はて？」一部に勤務時間の削減ばかりに目を向けている人がいるような。

十月二十二日の読売新聞の朝刊にはセリーグ優勝球団がクライマックスシリーズ（ＣＳ）ファイナルステージで敗れたことが掲載されるかと思ったら、一面を大きく飾ったのは「教科書　紙に回帰」という見出しだった。ＩＴ先進国のスウェーデンで脱デジタルに大きく舵を切ったとのこと。今では端末を「効果的な場面」だけで使うという。「紙の教科書や鉛筆を使う時間を増やしてから、集中力や考える力が伸びた」というものだった。これまた「はて？」今や個別最適な学習を可能にするアイテムとしてＩＣＴの活用を進めているにもかかわらず、警鐘を鳴らす記事として目を見張った。二十年後、三十年後の日本を支える子供たちを育てている私たち。新しいことに飛びつくのはよいが、早めの検証を行わないと子供たちの将来、日本の国の将来に大きな影響を及ぼすことになるかもしれない。

都では令和十年度までに十二学級以上の都内小学校全校において教科担任制が導入される。明治以来、百五十年以上続けられてきた小学校での指導法大改革である。高学年から専門性の高い教科指導によって教科の特性に触れた面白さを味わわせ、中学校での専科制に向けてのスムーズな接続、また複数の指導者によって多角的・多面的な児童理解を図るという。今日の若手教員の指導力低下という点から見ると、自身が担当する教科の教材研究の時間に充てることができ、英断ともいえるかもしれない。だが、担任しているクラスの授業を受け持つ時数も減る。これまでは朝から夕方まで、一日のうちの大半を一緒に過ごした「大好きな先生」に憧れて教師の道に進んだのは私だけではないはずだ。担任冥利という言葉も死語になるのか。

「はて・・・？」

中央区の紹介

中央支部長　鈴木　潤
（中央区立月島第三小学校）

本区は今年度、東京２０２０大会選手村跡地に小学校、中学校各一校が開校となり、区立小学校十七校、中学校五校としてスタートした。

特色ある教育活動として、小学校第四・五・六学年と中学校全学年で「学習力サポートテスト」を実施し、児童・生徒の基礎的・基本的な学習内容の定着状況及び問題解決能力等を調査し、分析結果に基づいた授業改善の実施、個に応じたきめ細やかな指導を行うことにより、学習意欲や学力の向上を図っている。

基礎的学習の積み重ねが特に重視される算数について、非常勤講師を全小学校に配置し、習熟度別指導や個別指導などを実施している。

また、理科授業の充実及び活性化を図るため、実験や観察などにおいて教員の支援を行う中央区独自の理科支援員を配置している。

基礎的な学力の定着と併せて、授業をより効果的、効率的に実施するため、大型提示装置やデジタル教科書等の他、一人一台のタブレット端末を活用する。これらＩＣＴ機器の活用により、個別最適な学び・協働的な学びやプログラミング教育など、思考力・判断力・表現力等を育成する授業づくりを推進する。ＩＣＴ支援員を全校に派遣し、教員の支援を行うとともにＩＣＴ機器を活用した授業内容の充実を図っている。

その他の取組としては、全幼小中において、本区独自のオリンピック・パラリンピック教育「学校・幼稚園２０２０レガシー」を継続している。

また、いじめ問題や生命にかかわる重大な事故等を未然に防止するため、命の尊さや友情等、心に訴える「命と心の授業」を全小中学校で実施している。

さらには、区内施設を活用し、日本の伝統文化に触れ合う機会を設け、能楽鑑賞教室（小学校第六学年）と歌舞伎鑑賞教室（中学校第三学年）を展開している。

子どもたちの相互交流を積極的に行うとともに、保育士と幼稚園教員、小学校教員との連携日を設定し、就学前教育の充実及び保育園、認定こども園、幼稚園、小学校の連携を推進している。

水上バスによる区内巡り

新宿区の紹介

新宿支部長　佐藤弘明
（新宿区立鶴巻小学校）

新宿という名称は、元禄時代の宿場町であった内藤新宿に由来するそうです。昭和二十二年に四谷区・牛込区・淀橋区が統合して今の新宿区となりました。公立小学校の開校は、明治六年に始まり、明治九年までに九校が設立されました。（新宿区教育百年史より）

その後、開校、統合などを経て、現在は、区立幼稚園十四園、幼保連携型子ども園三園、小学校二十九校、中学校十校、特別支援学校一校となりました。幼稚園十四園中十三園は小学校と併設しており、小学校施設の活用や小学生との交流が盛んに行われています。現存する最古の小学校は、戸塚第一小学校で、令和八年度に開校百五十周年を迎えます。

地域性として外国籍児童の在籍が多く、大久保小学校は、半数以上が外国にルーツのある児童となっています。学校だよりも十か国語に翻訳したものを発行し、学校生活を円滑に送れるよう配慮をしています。

最近の教育の動向で主なものは、令和六年度に高学年の教科担任制を全小学校二十九校で実施したことです。小規模から中規模の学校が多い新宿区において、単学級の学校では同じ授業を複数回実施できない実態から様々な工夫を行っています。令和七年度からは、中学年にも拡大する方針が示されており、モデル校の発表を参考に計画を立て始めました。

そして、特別支援教育の方向性についてプロジェクトチームが立ち上げられ、特別支援学級や特別支援教室の見直しを進めているところです。他地区の事例も参考にしながら、数年先を見据えての改革が進みつつあります。

その他、新宿区と関係の深い江戸東京野菜の栽培も盛んで、地域の皆様のご協力もいただきながら、内藤とうがらしや内藤かぼちゃ、鳴子うり、早稲田みょうがなどを栽培している学校もあります。学習とコラボした地域起こしに発展させる計画も聞こえてきます。

早稲田みょうがの栽培

品川区の紹介

品川支部長　隈部洋子
（品川区立大原小学校）

品川区は、東京二十三区の南東部に位置し、面積は二十二・八四平方キロメートル、人口は約四十二万人です。

学校数は、小学校三十一校・中学校九校・義務教育学校六校に加え幼稚園九園です。

品川区の教育の特色をいくつかご紹介します。

（一）九年間の一貫教育と義務教育学校

品川区では全国に先駆けて平成十八年度に小中一貫教育を開始しました。義務教育九年間を一貫として捉え、連続性・継続性のある教育活動を行ってきました。平成二十八年度、学校教育法等の一部改正で、小学校・中学校に加えて義務教育学校が新たな校種として位置づけられ、施設一体型小中一貫校六校が「義務教育学校」となりました。現在は、小学校・中学校・義務教育学校がそれぞれの特徴を生かして九年間の一貫教育を実施しているところです。

（二）品川区独自教科「市民科」

品川区独自の教科「市民科」は、「特別の教科　道徳」「特別活動」「総合的な学習の時間」に代わるもので、オリジナルの教科書を用いて義務教育九年間を通した系統的な指導で、市民（社会の形成者）としての資質と能力を育てています。

（三）体験学習の場

経済や社会の仕組みを実際に体験しながら学ぶ場として、五年生で「スチューデント・シティー」を、八年生では「ファイナンス・パーク」を実施しています。体験を通して、働くことの意義、お金の価値を学ぶだけでなく子ども達が、将来の自分の姿を思い描く機会にもなっています。

品川区では、これからも「持続可能な社会の作り手の育成」を目指し、子ども達を育んでまいります。

林試の森公園
生活科見学の様子

渋谷区の紹介

渋谷支部　佐伯孝司
（渋谷区立上原小学校）

渋谷区は、渋谷駅を中心とした大規模開発が進む一方、緑被率約二十三％と緑が多く、自然と都市の調和がとれた地域です。多様な文化が共存し、商業やスタートアップ企業の活動の中心地としても知られています。

令和六年二月、区教育大綱を改訂し、「つくろう。ちがいを活かし合える、未来の学校。」を目標に、「未来の学校で大切にする七つの力」として、基礎、共感、協働、探究、自律、挑戦、創造を挙げています。この七つの力を育むために、①一人ひとりの「ちがい」が活きる新たな学び・探究の推進　②誰でも安心・安全に挑戦できる教育環境と多様な取組の推進　③テクノロジー活用によるＤＸの加速化と楽しく温かな学校文化の構築　④地域と子どもの未来を共創する学校の推進に重点的に取り組んでいます。特に、①については、探究的な学びを充実させる「シブヤ未来科」の取組が各種メディアで取り上げられているところです。先生が教える授業から子供が学びを創る授業へと、新たな学びを推進しています。

シブヤ未来科の実施にあたっては文部科学省の授業時数特例校制度を活用し、各教科の授業時数の一割を総合的な学習の時間に上乗せして、シブヤ未来科の核となる総合的な学習の時間の充実を図っています。実社会や実生活から問いを見出し、課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現の探究のプロセスを経て、各教科等の学習で培った見方・考え方、知識・技能等を活用しながら解決を図ります。

各校が、区教育委員会や地域学校協働本部等と連携しながら、地域の企業や商店、行政機関や自治組織等とのつながりをもって学習活動を工夫し、自ら考え判断して学び続けていく自己調整力、多様な仲間と協働して新たな価値を生み出す創造力、自分が思い描く未来を実現していく挑戦力の育成に向けて取組を進めているところです。

行政や地域と連携した学習の成果を
地域イベントで発表する児童

板橋区の紹介

板橋支部長　松野薫子
（板橋区立志村坂下小学校）

板橋区は、東京二十三区の北西部に位置しており、人口は、二十三区で七番目に多い約五十六万人です。

板橋区では、「教育の板橋」をめざし、中長期的な方向性としての「いたばし教育ビジョン」、具体的な施策・事業を示した「いたばし学び支援プラン」を策定し、「保幼小接続・小中一貫教育」「板橋区コミュニティ・スクール、通称iCSの推進」「教職員の働き方改革」「誰一人取り残さないための居場所づくり」の四つの柱を重点施策としています。

区内の小学校は、健康学園を含めて五十二校、中学校は二十二校、幼稚園が一園あり、学校数が多いので、同窓生も多く、昨年度の会員数は管理職（校長十六名、副校長十二名）を含めて約百七十名確認できています。ただ、実際に会費を納入している会員となると、半数以下の人数となってしまっており寂しく感じています。

板橋支部の活動で特筆すべきことは、いろいろな会を催す際に、たくさんのOBの皆様にご参加いただけることです。OBの皆様の学生時代のお話をうかがい、当時に思いを馳せるのはとても楽しい時間です。

コロナ禍でしばらくできなかった会合も、少しずつ開催できるようになってきています。二月には本部から小川副会長をお招きして、板橋支部の新年懇親会と還暦を祝う会を合わせて行いました。また、五月には臼木参与をお招きし、板橋支部総会・懇親会を開催することができました。

いずれの会も準備の都合で従前よりも忙しい時期の開催となりましたが、OBの皆様から教諭までがそろって和気藹々と、日々のことや懐かしい学生時代の思い出を語り合う会となりました。締めの学生歌「若草もゆる」の全員合唱をするお顔を拝見しながら、同窓という関係の温かさや絆をしみじみと感じました。

今後も活動の一層の充実を図り、同窓生同士の連携を深めて参りたいと思います。

支部総会の様子

立川市の紹介

立川支部長　浅尾文
（立川市立第四小学校）

立川市は、東京のほぼ中央、西寄りに位置し、人口十八万五千人です。まちの玄関口である立川駅は中央線、青梅線、五日市線、南武線が乗り入れるとともに、多摩モノレールなどもあり、交通の要となっています。駅周辺には百貨店をはじめとする大型商業施設やオフィスビル、バラエティに富んだ飲食店などが集結し、朝から晩までいつも大勢の人で賑わっています。一方、中心市街地から少し歩けば広大な昭和記念公園の緑が広がり、北部を流れる玉川上水と南部を流れる多摩川、また北部には特産の「うど」を始めとする農業地帯があり、利便性や賑わいといった都市の魅力とやすらぎのある生活環境がコンパクトに共生しているという魅力があります。

そんな立川市の学習の大きな特徴は、この立川の魅力を子供たち自身が探究していくという「立川市民科」があることです。立川市民科は低学年が十五時間、小学校三年生以上では年間三十五時間実施されます。「まちを知り、まちを愛し、まちの担い手を育む」ことを目標とし、子供たち自身が課題を設定したり、実際に地域の方にインタビューをしたりしながら地域の願いも受けて様々な活動を展開していきます。同じ立川でも地域によって特色に差があるので、学習内容は学校ごとに異なっているのも特徴の一つです。

これからご紹介する事例は、本校五年生の「立川博士になろう」という活動です。立川市について主体的にまずは自分で調べ、次に協働的にジャンルごとのグループで学びを深めます。さらに、実際にグループごとにまちに出て確かめたり、インタビューをして願いや思いを受け止めたり、という校外学習を展開していき、最後に発表します。一年間を通した壮大な学びを通して、「立川市にはこんな魅力がたくさんあった」と、地域に誇りをもつ子が多い、すてきな立川市民科です。

ＪＲ立川駅にて
駅員の方にインタビュー

府中市の紹介

府中支部長　**髙橋伸嘉**
（府中市立新町小学校）

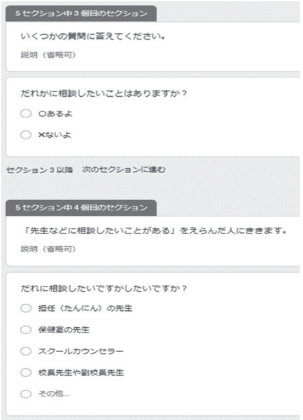
本市で実施している不登校、いじめ等への対策についてご紹介します。

一．サポートルームの全校設置

第三次府中市教育プランでは、子供の人権を守るために、全ての子供が共に教育を受けられる多様な学びの場の充実と整備を掲げ、不登校の未然防止や学校復帰を目的に、令和五年度から通称「サポートルーム」を全校設置しています。教室に入りづらさを感じているなどの不登校の予兆が現れたり、不登校状態が続いたりしている児童・生徒の居場所として活用し、欠席の長期化を防いでいます。原則として通常の授業時間の中でどの時間帯でも活用できます。教室には学校経営支援員や教職員、ボランティアの学生等がいて、子供たちに対応しています。自習やオンライン授業で学習に取り組む他、子供同士のコミュニティの場にもなっています。ここでの交流がよい登校刺激になり、教室復帰の足掛かりになることもあります。今年度は二年目を迎え、各校で施設の改善や活用ルールの見直し、人的支援の活用方法等、様々な検討を重ね、より一層効果的な場になるように工夫しています。

二．心の健康観察

今年度から、タブレット端末を活用した心や体調の変化の早期発見を図る取組を推進しています。子供たちの心や体調の変化を積極的に把握することで、いじめ・不登校等の早期発見、早期支援など、必要な支援を迅速に行っています。心の状態が「曇りや雨」だった場合は、学級担任が児童に声掛けを行うなどして、状況を具体的に把握します。必要に応じて学級担任等が面談したり、スクールカウンセラー等の相談に繋げたり、他の子供が関与している場合は、両者から丁寧に話を聞き取り、早期解決を図ったりします。これらにより、高い頻度で教員が子供たちの心の状態を把握することができ、即時的な対応に繋がっています。



心の健康観察

調布市の紹介

調布支部長　**野口直也**
（調布市立北ノ台小学校）

調布市は、武蔵野台地の南側に位置しています。市の北側には武蔵野の面影を残す深大寺や神代植物公園などの多くの緑が存在し、南側には多摩川がゆったりと流れている、水と緑に囲まれた自然豊かな環境にあります。

調布市と言えば・・・

・「ゲゲゲの鬼太郎」で知られる漫画家の水木しげる氏が住んでいたことから、市内にはキャラクターのモニュメントなどが設置され、イベントなども実施されています。「げげげ忌」には、校長が鬼太郎のちゃんちゃんこを着て校内を回ったり、鬼太郎にちなんだ給食が出されたりもします。

・味の素スタジアムがあり、五年前にラグビーのワールドカップ会場となったことがきっかけとなり、市内では現在も小学生によるタグラグビー大会が開かれています。FC東京と東京ヴェルディの本拠地でもあることから、市内の小学校が社会科見学で必ず訪れる場所でもあり、FC東京による子どもたち対象のサッカー指導も行われています。

・深大寺で開催される「深大寺だるま市」は、千三百年の歴史を誇り、日本三大だるま市としても有名です。

市内には、小学校二十校と中学校八校の公立校が置かれていますが、ちょうど連携しやすい学校数です。

調布市教育委員会の基本方針の一つ、「生命をいつくしみ、人の尊厳を重んじる心を育てる」。この言葉の背景には、十二年前、食物アレルギー事故により尊い児童の命が失われたことを決して風化させてはならない、という強い思いがあります。食物アレルギー研修や訓練も、様々工夫を凝らしたものになっています。

また、令和七年度には市内全校がコミュニティ・スクールとなることから、どの学校も調布市ならではの地域素材を存分に生かした、本当の意味での「地域とともにある学校づくり」を目指しています。

神代植物公園で
たてわり班遊び（北ノ台小学校）

小平市の紹介

小平支部長　山倉　尚
（小平市立小平第十三小学校）

小平市には、小学校十九校、中学校八校があります。玉川上水の開削後、武蔵野台地に新田開発が可能になったことによってつくられた小川村が、現在の小平市の原型です。以来、年を重ねるごとに発展を繰り返し、現在では大規模な再開発が進む都内のベッドタウンに発展しました。

小平市を有名にしているものといえば、丸ポストとブルーベリー栽培でしょう。市内には三十二本の丸ポストが、現役で、この数字は都内の自治体で最多です。さらに、ブルーベリー栽培発祥の地としても知られています。国内で最初に栽培が開始された町で、市のキャラクターには、ブルーベリーをモチーフとした「ブルベー」がいます。

小平市が目指す人間像は、「自立」「貢献」「共生」の三つのキーワードに集約されます。「社会的に自立し、地域・社会に貢献しながら、他者と共生する人」を育てるべく、全校が一丸となって教育活動を推進しています。中でも令和六年度から始まった市内全校で取り組む特別活動の充実は、本市教育活動の特色でもあります。

今年度は六月八日（土）に、市内の全小中学校で土曜授業において学級活動の授業が公開されました。当日の午後には、全小中学校から代表の児童・生徒が集まり、「こだいら特活サミット」が開かれました。中学校区ごとに各小中学校から持ち寄った標語を、中学生が中心になって一つに組みなおし、中学校区ごとの人権標語を採択しました。現在、中学校区ごとに、採択した標語の具現化に向けた取組が進んでいます。このサミットは、いじめや不登校など様々な問題を抱える学校において、問題の未然防止のため児童・生徒が自ら取り組める自主的・実践的な態度を育てることが目的です。小平では、なすことによって学ぶ特別活動を通して、児童・生徒の態度形成を図る取組が続いています。今後とも小平支部の活動へ、御支援を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

児童・生徒会サミット
当日の様子

国立市の紹介

国立支部長　内田辰彦
（国立市立国立第二小学校）

国立市は、市内北部にはＪＲ中央線が、そして、南西部にはＪＲ南部線が走り、中央線国立駅から南武線谷保駅に向かって、市の象徴である大学通りが通っています。人口は七万六千人を超え、様々なランキングでも人気の高い街になっています。一ツ橋大学などの大学をはじめとする教育機関が多数集まっていて、文教地区に指定されています。文教地区は、教育や研究、文化活動に適した環境を保つために、娯楽施設等の制限がありますが、そのことが住みやすさと結びついて人気が高まっていると考えられます。

市内の南部は菅原道真公ゆかりの谷保天満宮があり、緑豊かな田園風景や畑が広がっています。

市内の公立小学校は八校、公立中学校は三校です。その他に私立の小・中学校として、桐朋学園、国立音大付属小・中学校、国立学園小学校などがあります。市の人口・面積に比較して多くの教育施設があります。

国立市は市政として、ソーシャル・インクルージョンの街づくりを目指しています。その方針を受けて、特徴的な教育として、どの子もその子らしくいられる教育環境を目指し、インクルーシブ教育を進めています。特別支援教育に係る仕組みも充実し、小学校八校の中で知的固定学級が四校、情緒固定学級が三校、言語通級が一校設置され、中学校では知的固定学級が二校、情緒固定学級が一校設置されています。また、通常の学級での支援を充実せるため、スマイリーサポートという呼ばれる支援員を全校に複数名配置しています。

小学校・中学校の校長が共に十一校で連携して校長会を形成し、市教委と共に教育の充実に努めています。

同窓会としての活動は不十分なところもあり、他地区のような管理職以外の教員が参加する機会はもてていません。他地区の活動を参考にして活動の充実を図っていきたいと考えています。

国立駅旧駅舎と駅前の様子

シンガポール便り

シンガポール支部長　土田　昇
（シンガポール日本人学校チャンギ校）

雨季に入り、思わず身構えてしまうような閃光、地の底から響き渡るような雷鳴に日に数度見舞われ、そのあとにバケツをひっくり返したような熱帯特有の豪雨が一時間ほど続きます。子供たちは何事もないように活動を続ける中、着任半年以上を過ぎてなお、まだまだ慣れない毎日を過ごしております。

私の勤務するシンガポール日本人学校チャンギ校は、マレー半島の南端ほぼ赤道直下に位置する島国シンガポールにあります。東京二十三区とほぼ同じ面積の国土に約五百八十五万人が居住する世界第二位の人口密度を誇る都市国家です。古来より貿易立国であったシンガポールは先住のマレー人の他に、貿易などで移り住んだ中国人やインド人、イスラム系のアラブ人などで構成される多民族国家です。近年は、近未来都市としての顔を前面に、観光立国として注目を集めており、我々日本人にとって最も身近なアジアの国の一つとなってきています。毎年の旅行会社が行う様々なアンケートでも、シンガポールは「世界で最も安全・安心な国」や「テクノロジー対応の進んだ国」、「世界で最も競争力のある経済」などで上位に格付けされています。政府の強力なリーダーシップの下、金融・貿易・情報・教育などの分野において、東南アジア全体をけん引する存在です。

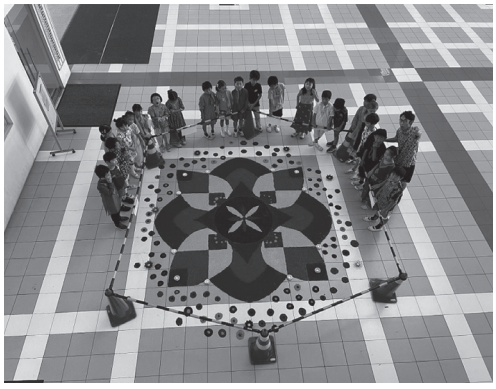
シンガポールと日本人学校の関わりは古く、大正元年に邦人有志によって日本人小学校が開校した時期に遡ります。太平洋戦争終戦で閉校しましたが、シンガポールが独立し、日本との外交関係を樹立した一九六六（昭和四十）年に、教員三名、児童二十七名でシンガポール日本人学校として正式に開校を迎えました。その後も好調な日本経済に背中を押され児童生徒数は年々増加の一途を辿り、一九九六（平成八）年には、二九三一名という世界一の児童生徒数を誇るほどに巨大化しました。現在は小学部二校、中学部一校の三校体制で運営を続けています。

私が勤務する小学部チャンギ校は、新型コロナウイルス感染症の打撃から立ち直りつつある状況ではあるものの、二〇二四（令和六）年現在、児童数六百一名・二十七学級で、減少傾向にあります。（内訳：一年生５学級・１２２名、二年生４学級・１０５名、三年生４学級・１１６名、四年生４学級・９３名、五年生３学級・８７名、六年生２学級・６２名、特別支援５学級・１６名）

学校職員の内訳ですが、管理職と学級担任および専科教員は四十名で派遣教員は校長を含めて二十四名（そのうち三分の一の八名はシニア派遣）です。シンガポールも日本国内同様教員不足の状態にあり、日本からシンガポール日本人学校の教員募集を受けて着任した十六名の現地採用教員で補っています。その他に英語の講師十五名、イマージョンの音楽と水泳の講師七名、図書館や特別支援教育の支援員が七名の総計六十九名の教職員で運営しています。近年はシニア派遣教員と現地採用教員の割合が年々増加していることが特徴といえます。私もシニア派遣教員として現在図工を教えています。

次に、本校の教育課程上の特徴としては、十年以上前から導入してきた児童生徒一人一台の環境の下での充実したＩＣＴ教育、全学年週三時間の習熟度別の英語学習があげられます。またイマージョン授業という英語で指導する水泳と音楽の時間がそれぞれ週一時間組み込まれています。それ以外にも、近隣校との学習交流はもちろん、多民族国家シンガポールならではのマレー、中国、インド各民族の行事に合わせた全校行事が特徴です。中でも面白いのが、児童も教員もその民族の祝日にその民族衣装を着て一日を過ごす『民族衣装デー』です。

今後も我々シンガポール日本人学校には、シンガポールの社会にあって、現地校やインター校と共存しつつ、日本らしさを前面に出していく日本人学校ならではの教育を確立させていくことが期待されていると考えます。


民族衣装デーの様子

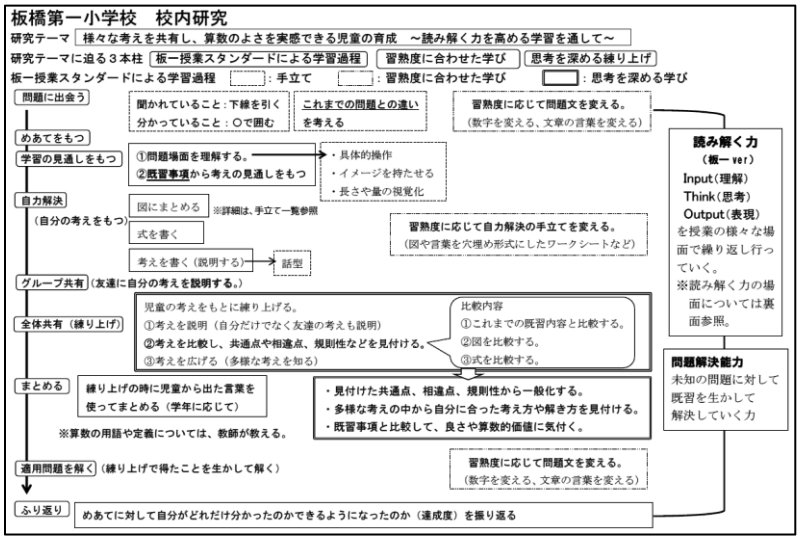
令和5年度・6年度　板橋の教育ビジョン　研究奨励校

研究主題

『様々な考えを共有し、算数のよさを実感できる児童の育成』
～読み解く力を高める学習を通して～

令和7年2月21日（金）発表　　板橋区立板橋第一小学校　校長　荻久保　剛正

本校は、一昨年の校内研究より、それまで研究を重ねてきた『国語科』から、『算数科』へと研究教科を変更し、板橋区の教育課題の一つである『読み解く力』の向上を目標に取組を進めて参りました。その経験を生かし、児童の『読み解く力』を伸ばすためには、さらにどんなことを追究していくべきかを考える機会として、板橋の教育ビジョン　研究奨励校の指定を受け、研究を深めていくこととしました。



昨年度は、研究主題を『問題内容を整理・理解し、正しく立式できる児童の育成』として、問題をいかに読み取らせるか、文章問題や式や図・表などの読み取らせ方の分析等を進めてきました。その成果をもとに今年度は、研究の３本柱の一つ『練り上げ「集団検討」の充実』に力を入れ、研究を進めて参りました。

その過程で、どの単元でも、どの教員でも共通の進め方で進めることができるよう『練り上げの類型』について整理をし、どのように練り上げさせていくのかを考えてきました。教師が先頭にたって児童の考えを練り上げ、説明をするのではなく、児童が互いに考えを出し合い、それらの考えにおける算数のよさを教師が実感させ、互いの考えのよい部分を意識しながら、児童が中心となり練り上げていく授業を目標に進めて参りました。

また、習熟に合わせた授業体系とし、Cコース（ゆっくり定着型）の児童の実態に合わせた二段階学習にも力を注いで参りました。

本時の問題を分析し、より単純に思考できる問題を集団で検討し、その学びを生かし、本時の問題を自力で解決していく子どもたち、終わった後に、満足感で自然と笑みがこぼれるそんな子どもたちを育てるために力を合わせてきました。

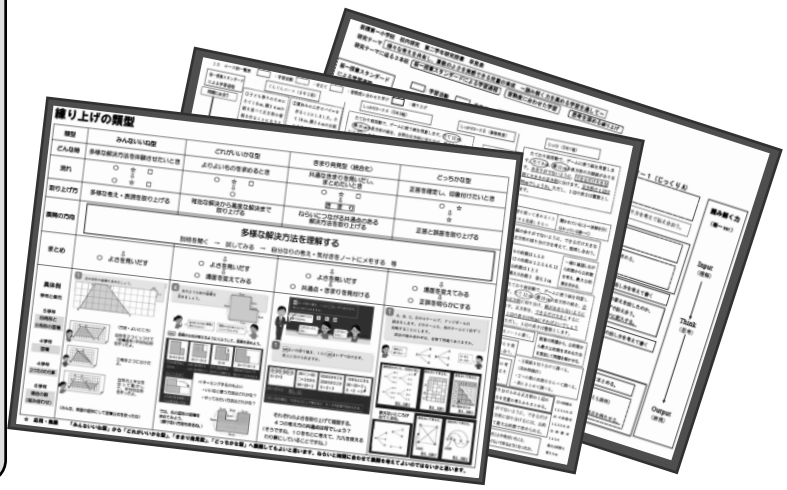
研究の成果を、二月二十一日に発表いたします。多くの皆様のご参観をお待ちしております。

１３：００　受付開始

公開授業
（１３：４５～１４：３０）
第３学年　３学級４展開
習熟度別学習

研究発表
（１４：５５～１６：３０）

研究協議
グループごとに
デイスカッション形式

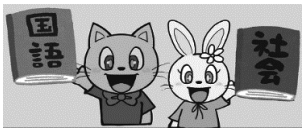


令和５・６年度　練馬区教育委員会教育課題研究指定校

『子供も教師もわくわくする授業づくり』

～主体的な学びを目指して～

果たして授業で子供たちはわくわくしているか。
その授業を行っている教師はわくわくしているか。



現行学習指導要領に明記されている「主体的・対話的で深い学びの実現」に向けた授業改善はなかなか進まない。授業は本来たのしく**わくわく**するものでなくてはならない。その**わくわく**が「学びのエンジン」となり、児童は主体的に学習に向かうのだと考えた。そしてそのためには授業を行う自分たち教師も**わくわく**しなければならない、という強い思いから本校の研究は始まった。

その中でも体育科や総合的な学習の時間などの教科書がない教科・領域ではなく、教科書のある国語科と社会科で、いかに教科書を教師が主体的に分析し、児童が教科書を主体的に読み解いていくかに取り組んできた。

主題にせまる手だてとして以下の４つの視点を設定した。

視点①	自ら課題を設定する。
視点②	自ら見通しをもって取り組む。
視点③	自ら課題を解決する。
視点④	自ら学びを振り返り次の学習や生活に生かしている。

研究発表一次案内

講演　講師

明星大学教育学部教育学科特任教授　相原　雄三　先生

研究発表会　令和７年２月21日（金）

練馬区立豊玉南小学校　　校長　長谷川　修

東京都練馬区豊玉南２－１４－１（練馬駅より高円寺行きバス豊玉中下（とよたまなか）車徒歩２分）

令和6年度　江戸川区教育委員会　教育課題実践推進校
教育課題「魅力ある学校づくり」
「のびるかみっ子　あなたがだいじ、あいてもだいじ」
～学級会から始まる魅力ある学校～

◇「のびるかみっ子」に

「自分のことを大事にし、それと同じように周りの人のことも大切に思う子を育てる」これは、教職に就いてから 35 年間、変わることのない私の信条です。素直で真面目な本校児童（かみっ子）に「もっともっと」という向上の欲が育ったらいい、そう考えて今年度は特別活動の「学級会」の指導に力を入れてみました。

特別活動の目指す「よりよい人間関係と自主的・実践的な態度を育成すること」は、「今よりもっと良い自分になろう！」「より良い仲間、集団をつくろう！」と伸びる子供たちを育てることに直結するからです。

◇「魅力ある学校」を作る 3 つの手立て

4月、全校児童に「魅力ある学校ってなんだろう？」と問いかけました。最も多く挙がってきた「楽しい学校」というキーワードを追究しながら、児童にも分かりやすい言葉で”かみっ子学級会””かみっ子トーク”“かみっ子タイム”という 3 つの手立てを考えました。

◇「行きたい学校、帰りたい家、そして住みたい町　上小岩」

「能登で大変な思いをしている方のために、上小岩小学校のみんなで募金をしたいです」

昨年3学期始業式の日の、二人の4年生児童の声。これが「特別活動に力を入れて、子供たちの自主性をもっと伸ばしたい」という私たちの願いにつながりました。

「学級活動元年」の研究、区の実践推進校という小さな小さな研究ですが、「楽しい学校　上小岩」で、生き生きと学習する児童とそれを支える教職員の姿を応援していただければ幸いです。

よりよい集団をつくる
『かみっ子学級会』

自他の考えを大切にする
『かみっ子トーク』

自身の伸びを確かめる
『かみっ子タイム』

授業公開・説明会
令和 7 年 2 月13日（木） 13:40－

≪公開授業≫　全 14 学級公開
（学級会・国語・社会・音楽・図画工作・体育・道徳）

≪講演≫
東京学芸大学　ICT/情報基盤センター
教授　森本 康彦　先生

江戸川区立上小岩小学校　校長　宮本 知司
〒133-0051　江戸川区北小岩 7-2-1
京成線 京成小岩駅下車　徒歩7分

学校 HP

令和5・6年度　東京都教育委員会体育健康教育推進校

令和6年度　成果発表会の御案内

研究主題

『心身ともに健やかな「いつも元気な子」の育成』

～　一からの体育授業や、健康・安全の取組を通して　～

日時　令和7年（2025年）2月20日（木）

午後1時35分から午後4時まで

内容　・公開授業　第5学年　器械運動　「跳び箱運動」
　　・実技研修会
　　・指導講評

※　若手の先生方や体育の実技指導の初歩を学びたい先生方向けの実技研修会を行います。
　そのため、動きやすい服装、体育館履きのご準備をお願いします。

講師

昭島市立光華小学校　校長

眞砂野　裕　先生

本校は、令和四年度より体育の研究を進め、令和五年度からは東京都の指定をいただいて体育の研究を進めてまいりました。

先進的で専門的な体育科研究を目指すだけでなく、体育科専門ではなく教員経験の少ない先生方や体育を得意としない先生方にも分かりやすい授業づくりを目指しました。すぐ、明日から授業に取り入れられるポイントやコツを整理し実践してきました。

概論的な難しいお話ばかりでなく、「こんな風にすると子供たちに伝わりやすい。」「子供たちの『できた！　分かった！』のためには？」などをたくさんお示しできればと思っています。

講師の眞砂野先生から、発表会当日、理論だけでなく実技研修会も開いていただき、「知る」だけでなく「する」も同時に行い、「深い学び・理解」につなげていただけたらと思います。

八王子までは遠いとは思いますが、必ず「来てよかった！」と笑顔になること間違いなしです。

心よりお待ちしております。

八王子市立椚田（くぬぎだ）小学校　　校長　平田　英一郎

＜所在地＞〒193−0942　東京都八王子市椚田町571番地2

＜電話＞　042-665-3475

＜アクセス＞

JR 中央線　八王子駅下車　京王バス「めじろ台行き（和田経由）」　25分

京王線　　めじろ台駅下車　京王バス「八王子駅南口行き」乗車　10分

　　狭間駅下車　　徒歩 10 分

本校 HP

今後、学校のHPにも、成果発表会の情報をUPする予定です。ご覧ください。

令和４･5･６年度　国立教育政策研究所教育課程実践検証協力校(算数科)
令和５・６年度　武蔵村山市特色のある学校づくり推進校

分かった!できた!使えた!を実感できる児童の育成

～ 算数科における見方や考え方を大切にして ～

本校では、令和４年度から３年間、文部科学省国立教育政策研究所教育課程実践検証校(算数科)の指定を受け、主に算数科における授業改善を目指して、研究を進めてきました。当初は、より質の高い算数授業を目標に、「関連付けること」をキーワードとして、「問いを繋ぐこと」や「統合的に捉えること」など、どちらかというと思考力を鍛えるための授業づくりに力点を置きました。

しかし、研究を進める中で、「わかる子･できる子のための授業になっていないか」、「取り残されている子がいてもいいのか」という議論が湧き上がり、研究の方向性が大きく変わりました。そして、算数授業の中で算数が苦手な子が「分かった！」、「できた！」と目を輝かせる授業を目指すべきなのではないかとの結論に至りました。数学的な見方･考え方を大切にしながら、その1時間で「何が分かり、何ができるようになったのかを自覚できる」授業づくりを目指しています。

研究発表会は以下の要領で、全学級(22学級)授業公開します。教育課程調査官の笠井健一先生からの講演も予定しております。学大同窓会の皆様におかれましても、ぜひ御参会の上、御指導を賜りたくお願い申し上げます。(なお参加につきましては、事前申し込みとなっております。以下のＱＲコードからお申し込みください。)

日時　令和7年2月7日（金）１３：１５～１６：１５

13:15　13:35　14:20　14:30　14:55　15:00　15:30　16:10　16:15

受付	公開授業	移動	各学年協議会	移動	研究発表	講演	謝辞

講演 テーマ
「分かった!できた!使えた!につながる、これからの算数教育」
講師 文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター
研究開発部 教育課程調査官　笠井 健一 先生

お申し込みはこちらから

午前5時間制実施校
徳育科のパイオニア　コミュニティースクール

東京都武蔵村山市立第八小学校

〒208-0021　東京都武蔵村山市三ツ藤2-50-1　（TEL）042-560-7151
（HP）https://www.city.musashimurayama.lg.jp/school/mmced8s/

～　第３回支部長会報告　～

第３回支部長会を１１月８日（金）に東京ガーデンパレスで開催しました。対面とオンラインのハイブリッド形式で開催しました。１５名の支部長の皆様にご参会いただき、令和７年の新年祝賀会の件を中心に話し合いが行われました。

支部長会終了後、部屋を移動して、新年祝賀会の料理の試食を兼ねた支部長を慰労する会を開きました。料理はとても美味しく、大学時代の思い出話から今日的な教育の話題に花を咲かせ、盛会のうちに終了しました。

オンラインで参加の皆様

理事長あいさつ

祝賀会の料理

試食会（慰労会）あいさつ

懇　談

乾　杯

副校長としての喜び

荒川区尾久西小学校　副校長　濱田　哲

私は昨年度昇任して、本校に着任しました。始めは当然のことながら何もかもが分からず、次から次へと押し寄せてくる交換便やメール、電話、質問等の多さに目を白黒させていました。校長先生に御指導いただいたり、前任の副校長先生に電話をして教えていただいたりしながら、一つ一つ職務を遂行していく中で、学校が行政、保護者、地域、関係機関等との連携の上で成り立っているということが少しずつ見え、より広い視野で教育をとらえることができるようになりました。

そのことを深く実感することができたのは、昨年度行われた創立百周年記念事業です。赴任校が決まった時は、創立百周年という記念すべき年に、他地区から昇任の私に務めることができるのかと、頭を抱えたものでしたが、いざ始まってみると、そんな弱音を吐く間もなく、することは山のようにありました。

校内では主幹教諭を中心に、記念集会や式典、アトラクションの準備や記念誌の作成を、地域では祝う会を発足し、様々な準備をしていただきました。さらには、ＰＴＡと連携し、式典・祝賀会にお越しいただいた方に満足していただけるよう、校内表示や接待等の計画を立てました。他にも案内状の発送や出席者の集約、様々な業者との折衝など、することは枚挙にいとまがないのですが、一つ一つが形になっていくことに喜びを感じました。何より、地域の方が本当に学校を大事にしてくださっていることが伝わり、式典・祝賀会を滞りなく終えることができた時は、大きな達成感を味わうことができました。

他にも、組織や業務内容を効率よくしていくことで、教員に授業や児童と接することに集中してもらうことができるということにも気付き、副校長の職務の面白さを見出すことができるようになりました。

日々の校内巡視の折や、自己申告の授業観察時の助言により、教員が成長していき、教員の成長を通して児童が成長していくことも大きな喜びです。

毎日の業務は楽しいことだけでなく、大変なこともありますが、学校経営方針「尾久西小学校に関わる全ての人が笑顔で過ごせる学校」の具現を一番の喜びとして、明るく元気に前向きに、精進してまいります。

出会いを大切にして

日野市立旭が丘小学校　副校長　小島直久

今年度、副校長として二年目を迎えました。一年を経験し、副校長としての仕事の進め方にも少しずつ慣れ、ようやく一歩先を見て自分の仕事ができるようになり始めました。

けれども、副校長一年目の当初、毎日の業務に追われ、目の前の仕事にしか目が向いていませんでした。自分には副校長は向いていないと考えることもありました。

そんな自分の考えを変えてくれたのは、ある校長先生のお言葉でした。

「周りを見ましょう。一緒に考えてくれる仲間がたくさんいますよ。」

新しい環境、初めての職で「何でもやらなければ。」と思い過ぎていたのかもしれません。下ばかり向いていた自分の顔を上げさせ、新たな気付きを与えてくださった言葉でした。

それからは、学校全体を見ることや対話することをより意識するようになりました。管理職として当たり前のことですが、それすらも自分はできていなかったのだと思います。

「副校長先生。」

副校長の職に就いてから、毎日、朝から、子供たちや先生方、保護者、地域の方々に、声をかけられます。

子供たちは「かけ算九九を覚えられたよ。」「今日の給食を全部食べられた。」など、自分の成長を話してきます。子供たちの成長は私が感じる副校長の仕事の魅力の一つです。

もう一つは先生方の成長が分かることです。本校も若手の教員が多く配属されています。授業観察などで助言もしますが、学年会で授業や子供の話題が話され、効果的な研修が行われています。先生方が子供たちの姿から指導について話し合い、明日の授業に臨む様子を見ると、頼もしく感じます。

また、保護者、地域の方からは、「旭が丘小の子供たちのよりよい成長のために、どんなことができるか。」という厚い想いを感じ取ることができます。このように、今では、人との出会いや様々な出来事が原動力となっています。

子供たちや教職員の様子を見ていると、自校の良さや課題が見えてきます。良いところをさらに伸ばし、課題はみんなで解決していく。今後も出会いと対話を大切にして、子供たち、地域、教職員のために何ができるかを考え、職務に取り組んでいきます。

子どもたちと共に

足立区立梅島第二小学校　木内綾香

私が勤める梅島第二小学校は、各学年二学級の学校です。大学四年生の時には、教育実習生としてお世話になりました。実習学年は一年生。指導教員は一年生担任のエキスパート。実習中は毎日が学びの連続でした。

大学を卒業して、わたしは新規採用教員として実習校に着任しました。教育実習時の恩師と共に一年生の担任となりました。入学式で、緊張した様子の子どもたち一人一人の顔を見ながら名前を呼んだ時、「先生になったんだ。頑張ろう。」と強く思いました。授業準備や学級経営、保護者対応、右も左も分からず、学年主任の真似をして必死に駆け抜けました。私の拙い授業を一生懸命に聞きながら、学ぼうとする子どもたちを見て、「どんなに大変でも授業は手を抜きたくない。頑張らなければ。」という一心で毎日の教材研究に取り組みました。二年目、私は持ち上がりで二年担任になりました。持ち上がりの強みを活かしていろいろなことに挑戦しました。一年目は指導書どおりの授業をすることで精一杯でしたが、「この子どもたちならこんなこともできるかも。あんなこともさせてみたい。」という思いから、自分なりに試行錯誤して授業準備をしました。前向きに学習する子どもたちのおかげで楽しみながら授業力向上に励むことができました。三年目、三年担任になりました。クラス替えはありましたが、実質、子どもたちとは三年目。学級経営には少し余裕が出てきて、いろいろな校務分掌を任せていただけるようになりました。四年目には、恩師に教わったことを活かすべく一年担任、そして学年主任を経験させていただきました。

そして現在、私は六年担任になりました。五年生からの持ち上がりです。高学年を担任する大変さを実感する毎日です。六年目にして初めてのことばかりで毎日悩みは尽きません。まだまだ教員として学び続けている最中です。

この六年間を振り返ると、子どもたちの成長が私自身の成長に大きく関わっていたと感じます。「これから先も、子どもたちと共にいつまでも成長し続けられる教員でありたい。」そんな思いを大切に、また明日からの教員生活を送っていきたいです。

わたしの「これまで」と「これから」

御蔵島村立御蔵島小学校　瀧澤和樹

私が教員になったきっかけは中学時代の理科の先生との出会いです。その先生は、私が進学先に迷っていると多角的な視点でアドバイスしてくれました。授業も分かりやすく何より私を信頼してくれました。そんな先生の姿から私も先生のような大人になりたいと感じました。そして先生の母校である東京学芸大学に入学し、勉学に励みました。

大学時代には、自分の専攻の社会科の授業以外にも特別支援教育や幼児教育の授業も履修し、自分の知見を広げることに努めました。また、長期休みにはバックパッカーとして世界中を回りました。どの国の人々も私の拙い英語を笑うことなく、必死に聞き取り交流してくれました。私が海外で様々なトラブルに遭っても、文化や人種に関係なく全力で助けてくれた現地の方々の優しさに触れられたことも貴重な経験です。今でも感謝しています。

大学を卒業し、教員生活は三鷹でスタートしました。初任校は学習指導・生活指導ともに素晴らしい先輩教員が多く、週に二～三時間授業を見学させていただきました。特に印象に残っているのは、四年生で共に学年を組んだベテランの先生です。その方は何よりも子供のことを考えて行動する方でした。子供の些細な表情や行動を見逃さず指導するとともに、子供たちの一人一人の「よさ」に注視して力を伸ばしていく姿は今でも私の憧れであり、目標です。

今は御蔵島という本土から南に約百九十キロ離れた島で教員をしています。教室の大きさは前任校の四分の一、学級の人数も五人と昨年まで三十人以上の担任をしていたことと比べるとかなりの小規模です。村の独特な行事や子供たちの自然についての知識に圧倒されながら毎日を楽しく過ごしています。ただ、子供たちの様子は三鷹の時と変わらず、色々なことに興味をもち、頑張ろうとする姿があります。

この仕事の素晴らしさは子供たちの未来設計に携わることができることにあると思います。これまでに私が出会った素晴らしい方々のように、他者への思いやりを大切にし、そっと手助けできるような教員を目指したいです。支えてくださる同僚や子供、保護者の方々に感謝をしながら、子供たちにとってよりよい教育をしていきます。

本部だより

会費納入のお願い

会計部長　**關口　泰正**

日頃より会計部の活動にご協力いただき、ありがとうございます。

会計部では九月末までの収支を中間決算としてまとめました。

九月末現在で、正会員費は四百十四名の方から、賛助会員費は百六十一名の方から、終身会員は八名の方から納入がありました。また事業収益として、獅子の代金が六百十九冊分、納入されました。納入していただいた支部の支部長の皆様、会計担当の皆様には御礼申し上げます。

支出としては、公益事業として主に広報誌「學藝」の発行、獅子・子獅子の発行、ホームページのサイト運営費等の費用がありました。

各支部の集まりも、コロナ禍前のようにできるようになってきた様子を伺っています。会費の納入につきましても、各支部で進めていただき、早めの納入への御協力をお願いいたします。

皆様の会費が充実した研修会や講演会、会員同士の親睦を深める機会などの活動へとつながります。今後とも皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

令和七年　新年祝賀会

総務部長　**青山　直志**

通常の支部長会は完全オンラインですが、第三回支部長会は令和六年十一月八日(金)文京区にあります東京ガーデンパレスの平安の間にて、対面とオンラインのハイブリッドで開催しました。十五名の支部長の皆様にご参会いただき、本部より令和七年の新年祝賀会のことを中心にご報告させていただきました。

令和七年の新年祝賀会は各支部の参加者の人数制限を撤廃します。コロナ禍後、九十名程度の着座形式、百十名程度の立食形式と試行錯誤を繰り返し、この度ようやくコロナ禍以前の形式に戻すことができました。但し、東京ガーデンパレスの高千穂の間のみで執り行いますので、キャパシティーの問題が生じます。そこで、予備調査を行い、大まかな人数を把握してから、個人で会費を振り込む本申込をするという段取りを踏みました。本部では百五十名を想定しておりますが、それを超える嬉しい悲鳴が出ればと考えます。

前述の支部長会終了後、パーティーションで仕切られた平安の間の隣に移動して、新年祝賀会の料理の試食を兼ねた支部長の皆様を慰労する会を行いました。料理はとても美味しく、お酒も入り、昔話から今日的な話題まで盛り上がりをみせた会場でした。

多くの同窓生が一同に介し、同窓生としての繋がりを強く意識できる新年祝賀会となることを心から願います。

研修部活動報告

研修部長　**清水　淳**

研修部の事業について、概要と今後の予定について報告いたします。

◆面接研修会について

九月八日、新宿区立市谷小学校において受講生三十三名を迎えて実施いたしました。森理事長の講演から始まり、午前・午後の二回、無事に面接研修を実施することができました。応援として二十五名の校長先生方にご参加いただいたことに心より感謝申し上げます。受講生の内訳は校長選考二十七名（小学校二十六名、中学校一名）Ａ選考二名、Ｂ選考四名でした。一人でも多くの合格者が出ることを期待しての大変に熱の入った指導でした。

◆論文研修会（主任選考）について

昨年度から、主任教諭選考受験者を対象とした論文研修を実施しています。令和七年二月一日に全体講演と指導者と受講者の顔合せを行い、三月末までに二回の添削を上限に論文指導をします。申込は、獅子第四十五集の表紙裏のＱＲコードからお願いいたします。参加費は会員・会員外共に三〇〇〇円です。主任教諭選考を考えている教諭の方々にお声かけください。

◆「獅子」の編集・送付

獅子第四十六集の編集作業に取り組み始めました。新しい情報なども加え、令和七年三月中旬には、各支部長先生に配布数を確認した後、所属校宛に送付いたします。ご期待ください。

名簿の訂正と次年度の準備について

調査部長　**藤山　由仁**

皆様の御協力のおかげをもちまして、十月に「令和六年度管理職等名簿」が完成し、学芸大学同窓会ホームページ上にＰＤＦで掲載することができました。いつも調査部に大きな御協力をくださり、心より感謝申し上げます。今後も、もし訂正・変更等の情報がありましたら、調査部長までお知らせください。随時最新の名簿に修正していきます。

今後の作業ですが、来年三月に、各支部長の皆様に最新の支部の名簿をメールで送信する予定です。令和七年度の「管理職等名簿」を作成する際、これを修正して御提出いただければ、作業も容易になると思います。どうぞよろしくお願いいたします。

また、支部長の皆様に特にお願いしたいのは、終身会員の名簿の確認・点検です。誠に申し上げにくいのですが、二十九年卒以前の皆様は、御高齢で物故者や御逝去、御不明の方もおられます。「その他」の欄に御逝去の年を記載し、次の年にはお名前を名簿から割愛していく作業が必要だと思います。

終身会員の登録の仕方は、希望者が支部長から申込書を受取り、御自身で手続きをする流れになっています。詳しくは管理職名簿の巻末に掲載してございます。また、終身会員への名簿の連絡は各支部が行うこととなっております。名簿を御希望の終身会員の方は所属支部に連絡を取り御相談ください。

読みたくなる「學藝」を目指して

広報部長　**加納　一好**

広報部は年三回の「學藝」の発行とホームページの運営を行っています。

「學藝」は、同窓生同士、同窓会と同窓生、大学と同窓生のつながりを大切に作成しています。

今号は支部紹介、研究発表会案内、副校長と若手の活躍が中心です。作成にあたっては各支部から多大なるご協力をいただきました。深く感謝いたします。研究発表会もコロナ禍以前と同様に開催できるようになりました。ぜひお出かけください。

「學藝」では、大学と同窓生のつながりの強化に努めています。

今号は、私たち皆の思い出に残る小金井祭を特集しています。小金井祭は昨年四年振りに食品販売ができるようになり、多くの模擬店でにぎわいました。さらに今年は来場人数の制限がなくなり、大いに盛り上がりました。

ホームページは即時性を大切にして、様々な情報を迅速に会員の皆様に提供しています。載せてほしい情報がありましたら、遠慮なくお知らせください。

発行が待ち遠しい「學藝」、毎日チェックしたくなるホームページを目指します。

【お知らせ】

副理事長の担当支部は次の通りです。支部総会等の担当になります。

◎副理事長の担当支部

稲葉孝之副理事長

中野、杉並、練馬、昭島、町田、狛江、多摩、羽村、あきる野、奥多摩、学芸大（十一地区）

渡辺裕之副理事長

千代田、中央、大田、渋谷、足立、葛飾、府中、日野、東久留米、西東京、瑞穂、都庁（十二地区）

茅原直樹副理事長

豊島、北、荒川、江戸川、青梅、小平、東村山、国分寺、福生、清瀬、高等学校（十一地区）

貝原俊明副理事長

文京、台東、墨田、江東、品川、八王子、立川、三鷹、調布、国立、檜原、特別支援学校（十二地区）

小川　優副理事長

港、新宿、目黒、世田谷、板橋、武蔵野、小金井、東大和、武蔵村山、稲城、日の出、島嶼（十二地区）

〈　令和七年
新年祝賀会について　〉

・日時
令和七年一月十九日（日）
正午～午後二時

・会場
東京ガーデンパレス
文京区湯島一―七―五

・会費
一万円

・内容
情報交換と懇親
人数制限なし
立食形式で行います。

詳細はホームページの案内をご覧ください。
なお、参加申し込みは十二月で終了しております。

◇　編集後記　◇

「學藝一五二号」の作成に際しては支部紹介に十支部、研究発表会のお知らせに五支部、若手と副校長の活躍に四支部など多くの支部の皆様のご協力をいただきました。さらには、シンガポール日本人学校に勤務されている土田先生からは「シンガポール便り」をお寄せいただきました。皆様、ご多用の中ありがとうございました。

表紙の写真は第三回支部長会の様子です。ハイブリッド化が進み、多くの支部長の皆様にリモートでご参加いただきました。その後は会場を移し祝賀会の試食会を開きました。支部長の慰労を兼ねています。私は支部長だった時、この会を楽しみにしていました。その試食会と料理の写真も載せてあります。新年祝賀会に来場される方は美味しい料理をお楽しみください。残念ながら来場されない皆様は、令和八年のご来場をお待ちしております。早く二部屋利用にして、あの盛り上がりを取り戻しましょう。

（広報部長　加納　一好）

学　藝　第一五二号
発行　令和六年十二月
東京学芸大学同窓会理事長
森　富子
東京都文京区小石川四の一の二十
電話〇三(三八一一)七二五一(代)
URL　http://www.o-gakugei.org
印刷
日本ハイコム株式会社
東京都文京区関口一の十九の二
電話〇三（三二三五）四四四一

我らのキャンパス

～　第７２回　小金井祭　～

１１月２日（土）から４日（月）までの３日間、小金井祭が開催されました。昨年は４年ぶりに食品販売が復活し、いろいろな模擬店が並びました。今年はさらに入場制限がなくなり、大勢の来校者にかつての小金井祭の賑わいがもどってきました。

今年のテーマは「よりどりみどり」。学芸大生が皆さんと多種多様でよりどりみどりな企画があふれる素敵な小金井祭を作っていきたいという想いが込められています。

模擬店だけでなく、ステージ、教室、ウッドデッキなどでのイベントは、どこも小さな子供を連れた親子連れで賑わっていて、笑顔いっぱいでした。教員養成系大学らしい大学祭でした。

正門

模擬店

ウッドデッキ

ウッドデッキ

ステージ

Ｃ棟前広場